

苗立枯病

留意事項

- 1 病原菌は、リゾクトニア菌、ピシウム菌などである。
- 2 オースサイド水和剤80の成分キャプタンの総使用回数は5回以内（種子粉衣は1回以内）。

防除方法

- 1 床土は毎年更新する。
- 2 過湿にならないように、かん水量に注意する。
- 3 換気に努め、苗を強健に育てる。
- 4 発生後1～2日でまん延することがあるので、被害株は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 5 は種前の種子に、下記のいずれかの薬剤を粉衣する。
 - ・ [オースサイド水和剤80](#) <M4> 【種子重量の0.2～0.4% は種前／1回】
 - ・ [リゾレックス水和剤](#) <14>
【苗立枯病（リゾクトニア菌） 種子重量の0.5% は種時／1回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を2L/m²かん注する。
 - ・ [オースサイド水和剤80](#) <M4> 【800倍 は種後から2～3葉期／5回】

すすかび病

留意事項

- 1 施設栽培での発生が多い。
- 2 中・下位葉の葉裏から発病しやすいので、注意して観察し、早期防除に努める。
- 3 病原菌は感染後潜伏期間が長いので、育苗中から防除を徹底する。
- 4 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 5 QoI剤<<11>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 6 アグロケア水和剤は、病原菌に感染する前に植物表面を成分の微生物で覆う仕組みから、植物が成長した部分には効果が及ばない。このため、病気が発生する前に一定間隔で散布する必要がある。
- 7 ダコニール1000、プロポーズ顆粒水和剤の成分TPNの総使用回数は、合計4回以内。

防除方法

- 1 被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 2 過湿にならないように管理する。
- 3 窒素過多にならないような肥培管理に努める。
- 4 栽培終了後、施設を密閉し高温にして施設資材などに付着した病原菌を死滅させる。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ダコニール1000](#) <M5> 【1000倍 前日/4回】
 - ・ [ベルコート水和剤](#) <M7> 【3000倍 前日/3回】
 - ・ [アグロケア水和剤](#) <BM2> 【2000倍 前日/—】
- 6 発生を認めたら直ちに下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) <40> <M5> 【1000倍 前日/4回】
 - ・ [ファンタジスタ顆粒水和剤](#) <<11>> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [スコア顆粒水和剤](#) <3> 【2000倍 前日/3回】
- 7 施設内では、くん煙剤の使用も有効である。(Ⅻ省力安全防除 1くん煙(1) 参照)

灰色かび病

留意事項

- 1 低温多湿時に発生が多い。
- 2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 ボトキラー水和剤は気温10℃以上で使用する。
- 4 ボトキラー水和剤は拮抗微生物を成分とする薬剤で、他剤との混用には注意が必要である。
- 5 ボトキラー水和剤は、暖房機ダクトが設置されている施設では、ダクト内投入による処理法も有効である。(Ⅻ省力安全防除 3ダクト内投入 参照)
- 6 QoI剤<<11>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 施設内の換気を十分に行う。
- 2 敷わらまたはポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 3 開花後の花卉をとり、病原菌の侵入を防ぐとともに、被害葉・果実を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 ほ場の排水を良くする。
- 5 チューブかん水や地中かん水を行う。
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ベルコート水和剤](#) <M7> 【3000倍 前日/3回】
 - ・ [セイビアーフロアブル20](#) <12> 【1000~1500倍 前日/3回】
 - ・ [ボトキラー水和剤](#) <BM2> 【野菜類 1000倍 発病前~発病初期/—】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ゲッター水和剤](#) <1> <10> 【1000~1500倍 前日/5回】
 - ・ [ファンタジスタ顆粒水和剤](#) <<11>> 【2000~3000倍 前日/3回】
 - ・ [ピクシオDF](#) <17> 【2000倍 前日/4回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

8 施設内では、くん煙剤も有効である。(Ⅷ省力安全防除 1くん煙 (1) 参照)

うどんこ病

留意事項

- 1 高温乾燥時に発生が多い。
- 2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 ボトキラー水和剤は気温10℃以上で使用する。
- 4 ボトキラー水和剤は拮抗微生物を成分とする薬剤で、他剤との混用には注意が必要である。
- 5 ボトキラー水和剤は、暖房機ダクトが設置されている施設では、ダクト内投入による処理法も有効である。(Ⅷ省力安全防除 3ダクト内投入 参照)
- 6 SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 窒素過多を避ける。
- 2 施設栽培では適度のかん水を行い、過乾を避ける。特に温風暖房を行うところでは注意する。
- 3 被害葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ベルコート水和剤](#) <M7> 【3000倍 前日/3回】
 - ・ [フルピカフロアブル](#) <9> 【2000~3000倍 前日/4回】
 - ・ [ボトキラー水和剤](#) <BM2> 【野菜類 1000倍 発病前~発病初期/ー】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [パレード20フロアブル](#) <<7>> 【2000~4000倍 前日/3回】
 - ・ [パルミノ](#) <M10> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [パンチョTF顆粒水和剤](#) <U6> <3> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [スコア顆粒水和剤](#) <3> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ミギワ10フロアブル](#) <52> 【1000倍 前日/3回】

菌核病

留意事項

- 1 気温20℃前後、多湿条件で発生が多い。
- 2 QoI剤<<11>>、SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 施設栽培では換気に努める。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 夏期たん水して、土中で越夏している菌核を腐敗させる。
- 3 加温栽培では、夕方早めに加温する。
- 4 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 発病を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ゲッター水和剤](#) < 1 > < 10 > 【1000～1500倍 前日／5回】
 - ・ [パレード20フロアブル](#) << 7 >> 【2000～4000倍 前日／3回】
 - ・ [ロブラール水和剤](#) < 2 > 【1000倍 前日／4回】
 - ・ [ファンタジスタ顆粒水和剤](#) << 1 1 >> 【2000～3000倍 前日／3回】
 - ・ [ピクシオDF](#) < 1 7 > 【2000倍 前日／4回】

青枯病

留意事項

- 1 夏期高温時に被害が多い。
- 2 土壌の乾湿度の差が大きいほど発生しやすい。
- 3 発病株に触れた収穫ばさみ等によって伝染する。

防除方法

- 1 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ばれいしょ等）の連作を避ける。
- 2 センチュウ類防除を徹底する。
- 3 排水を良好にし、過湿、過乾燥を避ける。
- 4 地温の上昇を防ぐため、敷きわらなどを行う。
- 5 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 抵抗性台木に接木する。
- 7 化学肥料等の集中的な施用を避け、なすの根を傷めないようにする。
- 8 発病が疑われる株の作業は最後に行う。
- 9 施設栽培では夏期高温時に、太陽熱利用による土壌消毒を行う。（**XⅢ**土壌消毒 1 太陽熱利用による土壌消毒（太陽熱消毒） 参照）
- 10 本ぽを土壌消毒する。（**XⅢ**土壌消毒 2土壌病害虫等を対象とした薬剤による土壌消毒（4） 参照）
 - ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) 劇 <—>
 - 【30kg／10a 均一に散布して土壌と混和 は種または定植21日前／1回】

褐色腐敗病

留意事項

- 1 降雨による土壌の跳ね上がりで伝染する（露地での発生が多い）。
- 2 QoI剤<< 1 1 >>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 1 なす科、うり科野菜の連作を避ける。
- 2 土の跳ね上がり防止のため、敷わらまたはポリフィルムでマルチングする。
- 3 被害株の早期発見に努め、発病した果実、枝等は直ちに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 排水を良好にして過湿を避ける。
- 5 過繁茂を避け、窒素過多にならないようにする。
- 6 施設栽培では、夏期高温時に太陽熱利用による土壤消毒を行う。(XⅢ土壤消毒 1 太陽熱利用による土壤消毒(太陽熱消毒) 参照)
- 7 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ランマンフロアブル](#) <21> 【2000倍 前日/4回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) <M5> <40> 【1000倍 前日/4回】
 - ・ [レーバフロアブル](#) <40> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ホライズンドライフロアブル](#) <27> <<11>> 【2500倍 前日/3回】

褐紋病

留意事項

- 1 褐紋病菌に感染した採種用のなすから種子伝染する。
- 2 主に露地栽培の水なすで発生するが、施設栽培の水なすでも育苗期や定植後に発生することがある。
- 3 発病茎や果実は次作まで感染力を保持しうる。
- 4 QoI剤<<11>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 褐紋病菌に感染していない健全な種子を使用する。
- 2 前年被害が発生したほ場での作付けを避ける。
- 3 土の跳ね上がり防止のため、敷わらまたはポリフィルムでマルチングする。
- 4 過繁茂を避け、窒素過多にならないようにする。
- 5 排水や風通しを良好にし、湿度を上がりにくくする。
- 6 発病を確認したら柄子殻(小黑点)が作られる前に直ちに発病部位を除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 7 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ベルコートフロアブル](#) <M7> 【2000倍 前日/3回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ベンレート水和剤](#) <1> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [スクレアフロアブル](#) <<11>> 【2000倍 前日/3回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

半身萎凋病（はんしんいちょうびょう）

防除方法

- 1 苗床土は毎年更新する。
- 2 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ばれいしょ等）の連作を避け、なるべく田畑輪換を行う。
- 3 施設栽培では、夏期高温時に太陽熱利用による土壤消毒を行う。（**XⅢ**土壤消毒 1 太陽熱利用による土壤消毒（太陽熱消毒） 参照）
- 4 排水を良好にする。
- 5 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 抵抗性台木に接木する。
- 7 本ぼを土壤消毒する。（**XⅢ**土壤消毒 2土壤病虫害等を対象とした薬剤による土壤消毒（4） 参照）
 - ・ **バスアミド微粒剤**、**ガスタード微粒剤** 劇 <—>
 - 【20～30kg／10a 均一に散布して土壤と混和 は種または定植21日前／1回】
- 8 発病を認めたら下記の薬剤を土壤かん注する。
 - ・ **ベンレート水和剤** <1>
 - 【500倍 200～300ml／株 定植後～収穫14日前／3回】または
 - 【1000倍 400～600ml／株 定植後～収穫14日前／3回】

アザミウマ類

留意事項

- 1 主にミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが発生する。
- 2 施設内では年中発生する。ミカンキイロアザミウマは露地でも越冬が可能である。
- 3 ミナミキイロアザミウマは葉裏、花、幼果（へたの下）に多い。
- 4 ミカンキイロアザミウマは花によく集まる習性があり、水なすでの被害が多い。
- 5 ほ場周辺の雑草等にも生息する。
- 6 スワルスキー、リモニカ、ククメリスを利用する場合は、他の薬剤の影響に注意すること。（**XⅦ**参考資料 4ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響 参照）
- 7 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 8 モベントフロアブルの成分スピロテトラマトの総使用回数は、3回以内（但し、かん注は1回以内）。
- 9 グレーシア乳剤は水なす、賀茂なすの果実には薬害を生じるので、使用しない。

防除方法

- 1 露地栽培ではほ場周辺に、施設栽培では開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下の赤色等）を展張し、成虫の飛来を防ぐ。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングして成虫の飛来を防ぐ。
- 3 うね面をビニール等でマルチングし、土中で蛹化するのを防ぐ。
- 4 施設内やほ場周辺の除草を徹底する。
- 5 施設栽培では、夏期の栽培終了後、7～10日間密閉して枯死させ、残さに残る虫を餓死させる。
- 6 残さ処理終了後に2週間程度太陽熱消毒等を行う。(XⅢ土壤消毒 1太陽熱利用による土壤消毒(太陽熱消毒) 参照)
- 7 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4 A>
【1～2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) <2 3>
【500倍 かん注(50ml/株) 育苗期後半～定植当日/1回】
 - ・ [アクタラ粒剤5](#) <4 A>
【ミナミキイロアザミウマ 1g/株 植穴処理 定植時/1回】
【ミカンキイロアザミウマ 2g/株 植穴処理 定植時/1回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [モベントフロアブル](#) <2 3> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ウララDF](#) <2 9> 【ミカンキイロアザミウマ 2000倍 前日/3回】
 - ・ [アグリメック 劇](#) <6> 【500～1000倍 前日/3回】
 - ・ [スピノエース顆粒水和剤](#) <5> 【2500～5000倍 前日/2回】
 - ・ [ファインセーブフロアブル 劇](#) <3 4> 【1000～2000倍 前日/3回】
- 9 施設栽培では、天敵を利用する方法もある。
 - ・ [スワルスキー](#) <-(生)>
【野菜類(施設栽培) 250～500ml/10a(約25000～50000頭) 放飼
発生直前～発生初期/—】
【野菜類(露地栽培) 250～500ml/10a(約25000～50000頭) 放飼
放飼後の厳冬期の月平均気温が10℃を下回る地域 発生直前～発生初期/—】
 - ・ [リモニカ](#) <-(生)>
【野菜類(施設栽培) 2～4L/10a(約25000～50000頭) 放飼
発生直前～発生初期/—】
 - ・ [ククメリス](#) <-(生)>
【野菜類(施設栽培) 50～100頭/株 放飼 発生初期/—】
- 10 施設栽培では、くん煙剤も有効である。(Ⅷ省力安全防除 1くん煙(1) 参照)
- 11 水なす、賀茂なす以外のなすには下記の農薬を散布する。
 - ・ [グレーシア乳剤](#) <3 0> 【2000倍 前日/2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

コナジラミ類

留意事項

- 1 オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生する。
- 2 幼虫、蛹は葉裏に寄生しているので、葉裏によくかかるように散布する。
- 3 スワルスキープラスを利用する場合は、他の薬剤の影響に注意すること。(XⅦ参考資料 4ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響 参照)
- 4 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、3回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。
- 5 モベントフロアブルの成分スピロテトラマトの総使用回数は、3回以内（但し、かん注は1回以内）。
- 6 グレーシア乳剤は水なす、賀茂なすの果実には薬害を生じるので、使用しない。

防除方法

- 1 施設栽培では開口部に防虫ネット（目合い0.4mm）で展張し、成虫の飛来を防ぐ。
- 2 ほ場内や周辺の除草を行う。
- 3 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A >
 - 【1～2g/株 株元散布 育苗期/1回】または
 - 【1～2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
 - 【1g/株 株元散布 生育期（収穫前日） /2回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) < 2 3 >
 - 【500倍 かん注（25～50ml/株） 育苗期後半～定植当日/1回】
 - ・ [プリロッソ粒剤オメガ](#) < 2 8 > 【2g/株 株元散布 育苗期後半～定植時/1回】
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アグリメック 劇](#) < 6 > 【500～1000倍 前日/3回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) < 2 3 > 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ベストガード水溶剤](#) < 4 A > 【1000～2000倍 前日/3回】
 - ・ [チェス顆粒水和剤](#) < 9 B > 【5000倍 前日/3回】
- 5 施設栽培では、天敵を利用する方法（茎や枝等に吊り下げて放飼）もある。
 - ・ [スワルスキープラス](#) < - (生) >
 - 【野菜類（施設栽培） 100～200パック/10a（約25000～50000頭） 放飼 発生直前～発生初期/ー】
- 6 水なす、賀茂なす以外のなすには下記の農薬も散布する。
 - ・ [グレーシア乳剤](#) < 3 0 > 【2000倍 前日/2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

アブラムシ類

留意事項

- 1 主にワタアブラムシ、モモアカアブラムシが発生する。
- 2 水なすの露地栽培では、ウイルス病が発生しやすいので、4月下旬からの有翅アブラムシ類の防除を徹底する。
- 3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 4 オルトラン粒剤、ジェイエース粒剤の成分アセフェートの総使用回数は1回。
- 5 モベントフロアブルの成分スピロテトラマトの総使用回数は、3回以内（但し、かん注は1回以内）。

防除方法

- 1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
- 2 施設栽培の開口部に防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、侵入を防止する。
- 3 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A >
【1g/株 株元散布 育苗期/1回】または【1g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
 - ・ [オルトラン粒剤](#)、[ジェイエース粒剤](#) < 1 B >
【3~6kg/10a (1~2g/株) 作条散布または植穴処理 定植時/1回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) < 2 3 >
【500倍 かん注 (25~50ml/株) 育苗期後半~定植当日/1回】
 - ・ [プリロッソ粒剤オメガ](#) < 2 8 > 【2g/株 株元散布 育苗期後半~定植時/1回】
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) < 4 A > 【3000倍 前日/2回】
 - ・ [トレボン乳剤](#) < 3 A > 【1000~2000倍 前日/3回】
 - ・ [トランスフォームフロアブル](#) < 4 C > 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) < 2 3 > 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ウララDF](#) < 2 9 > 【2000~4000倍 前日/3回】
- 5 施設栽培では、くん煙剤や常温煙霧剤の使用も有効である。（Ⅺ省力安全防除参照）

オオタバコガ

留意事項

- 1 広食性で、多くの作物を加害する。
- 2 早期発見に努め、若齢幼虫時に防除する。

防除方法

- 1 幼虫による被害が大きいため、食害痕や虫フンに注意し、捕殺に努める。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い4mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 3 摘除した茎葉や果実、被害果にも、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アファーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [プレバソフロアブル5](#) <28> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【1000倍 前日/4回】
 - ・ [スピノエース顆粒水和剤](#) <5> 【5000倍 前日/2回】
 - ・ [アクセルフロアブル](#) <22B> 【1000~2000倍 前日/3回】

ネキリムシ類

防除方法

- 1 地中の幼虫の捕殺に努める。
- 2 育苗期（育苗期後半）または、定植時に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プレバソフロアブル5](#) <28>
【100倍 散布液量：1株当たり25ml かん注 育苗期後半～定植当日/1回】
 - ・ [ベリマークSC](#) <28>
【400株あたり薬量：25ml、希釈水量：10~20L（1株当たり25~50mL） かん注 育苗期後半～定植当日/1回】
- 3 は種時または定植時に下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダイアジノン粒剤5](#) <1B>
【4~6kg/10a 全面土壌混和または作条土壌混和 は種時または定植時/2回】
- 4 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ガードベイトA](#) <3A> 【3kg/10a 株元散布 生育初期/3回】

ハスモンヨトウ

留意事項

- 1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 グレーシア乳剤は水なす、賀茂なすの果実には薬害を生じるので、使用しない。

防除方法

- 1 ふ化直後～若齢幼虫時には集団で生活しているので、被害葉ごと除去する。
- 2 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い4mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アファーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日/2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【1000倍 前日/4回】
 - ・ [アクセルフロアブル](#) <22B> 【1000~2000倍 前日/3回】
 - ・ BT剤 <11A> (IX野菜類の病害虫防除 3野菜類 参照)
- 4 水なす、賀茂なす以外のなすには下記の農薬も散布する。
- ・ [グレースシア乳剤](#) <30> 【2000倍 前日/2回】

テントウムシダマシ類

留意事項

- 1 幼虫、成虫ともに葉の裏から表皮を残して食害する。
- 2 6~7月に雨の少ない年は発生が多い。
- 3 コテツフロアブルは、幼苗期(1~3葉期)には薬害を生じるおそれがあるので使用しない。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [モスピラン顆粒水溶剤](#) 劇 <4A> 【2000~4000倍 前日/3回】
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 <13> 【2000倍 前日/4回】
 - ・ [アディオン乳剤](#) <3A> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [アクセルフロアブル](#) <22B>
 - 【ニジュウヤホシテントウ 1000~2000倍 前日/3回】
 - ・ [スミチオン乳剤](#) <1B> 【1000~2000倍 前日/5回】

ハモグリバエ類

留意事項

- 1 マメハモグリバエ、トマトハモグリバエなどが発生する。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、3回以内(但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内)。

防除方法

- 1 育苗期の防除を徹底し、本ほに被害苗を持ち込まない。
- 2 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット(目合い0.8mm以下)を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 3 ビニール等でマルチングし、土中で蛹化するのを防ぐ。
- 4 被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 ほ場内や周辺の除草を行う。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

6 下記の薬剤を施用する。

- ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4 A>
【2g/株 株元散布 育苗期/1回】または
【1~2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
- ・ [ベリマークSC](#) <2 8>
【400株あたり薬量：25ml、希釈水量：10~20L（1株当たり25~50mL） かん注
育苗期後半~定植当日/1回】

7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

- ・ [アフーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日/2回】
- ・ [ダントツ水溶剤](#) <4 A> 【2000~4000倍 前日/3回】
- ・ [ディアナSC](#) <5> 【2500~5000倍 前日/2回】
- ・ [トリガード液剤](#) <1 7> 【マメハモグリバエ 1000倍 前日/3回】

ハダニ類

留意事項

- 1 スパイカルEXを利用する場合は、他の薬剤の影響に注意すること。（XⅦ参考資料 4 ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響 参照）
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ダニオーテフロアブル](#) <3 3> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [スターマイトフロアブル](#) <2 5 A> 【2000倍 前日/1回】
 - ・ [マイトコーネフロアブル](#) <2 0 D> 【1000倍 前日/1回】
 - ・ [カネマイトフロアブル](#) <2 0 B> 【1000~1500倍 前日/1回】
 - ・ [サンクリスタル乳剤](#) <-> 【300~600倍 前日/-】
- 2 施設栽培では、天敵を利用する方法もある。
 - ・ [スパイカルEX](#) <- (生)>
【野菜類 100~1250ml/10a（約2000~25000頭） 放飼 発生初期/-】
【野菜類 20~3000頭/100株 放飼 発生初期/-】
- 3 施設内では、くん煙剤の使用も有効である。（ⅩⅦ省力安全防除 1くん煙(1) 参照）

チャノホコリダニ

留意事項

- 1 幼果や新梢の先端部を集中的に加害する。
- 2 スワルスキープラスを利用する場合は、他の薬剤の影響に注意すること。（XⅦ参考

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

資料 4ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響 参照)

- 3 コテツフロアブルは、幼苗期（1～3葉期）には薬害を生じるおそれがあるので使用しない。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 <13> 【2000倍 前日/4回】
 - ・ [スターマイトフロアブル](#) <25A> 【2000倍 前日/1回】
 - ・ [コロマイト乳剤](#) <6> 【1500倍 前日/2回】
 - ・ [カネマイトフロアブル](#) <20B> 【1000倍 前日/1回】
 - ・ [サンクリスタル乳剤](#) <-> 【300～600倍 前日/-】
- 2 施設栽培では、天敵を利用する方法（茎や枝等に吊り下げて放飼）もある。
 - ・ [スワルスキープラス](#) <-(生)>
【野菜類（施設栽培） 100～200パック/10a（約25000～50000頭） 放飼
発生直前～発生初期/-】

ネコブセンチュウ

防除方法

- 1 栽培終了後、被害根はていねいに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 2 夏期に、たん水して、生息密度を低くする。
- 3 本ぽを土壤消毒する。（**XIII**土壤消毒 2土壤病害虫等を対象とした薬剤による土壤消毒（4） 参照）
- 4 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ネマトリンエース粒剤](#)、[ネマキック粒剤](#) <1B>
【15～20kg/10a 全面土壤混和 定植前/1回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。